

「スウウー——」。舞台上の9人が目線で互いを確認しながら大きく息を吸い込むと、力強いハーモニーがむつ市の下北文化会館に響き渡った。「青い海と森の音楽



祭」の閉幕から1週間後の7月12日、東通中学校吹奏楽部は県吹奏楽コンクールの中央地区大会で、息の合った演奏を披露し、小編成の部で県大会への出場を決めた。

② 体で感じた演奏

仲間信じ「自分の一音」



「あの日から変わったんです」。そう語るのは、相内美友さん（3年）だ。2、3年生9人と少人数で活動する同部は、音に厚みが出せないことが悩みだった。同校で行われた、プロの演奏家8人によるアウトリーチでの経験が部員の心に変化をもたらした。

生演奏は多くの部員にとって初めてだった。「音に神経が通っていて感情が伝わってきた」（川島咲帆さん・同）、「互いの音を聴きながら、自分



たちの音を作っていた」（川原田紘乃さん・同）と、部員たちは演奏者のパッションに心を動かされていた。

アウトリーチ以来、部員たちは「自分の一音」を大切にしつつ仲間の音を信じて演奏するようになった。本番では互いの

笑顔が視界に入り、「いい音が出せている」と確信し合えたという。私たちがだからこそ奏でられる音がある。その気づきが演奏を一つにした。

演奏者との心のつながりは、青森市の青森東高校で行われたアウトリーチでも生まれた。

気温30度を超す蒸し暑さの中、体育館に集まった生徒たちは床に体育座りしながら、プロの音楽を体で感じようとしていた。

「もっと近くおいで」。ピアニスト・横山幸雄さんは、ショパンの《英雄ポロネーズ》の演奏前、優しく声をかけた。

乙部竜乃介さん（3年）は「心がきゅーっと締めつけられたり、心が躍ったり。演奏の間、心がとても忙しかった。まるで会話しているような気持ちでした」と話した。

演奏へのお返しとして、合唱部の生徒たちからサプライズが用意されていた。音楽祭の誕生を祝って「ハッピーバースデー」が披露された。

（加藤桃子）